大治朋子 著

『「イスラエル人」の世界観』

毎日新聞出版　2025年6月刊
定価：　本体1800円＋税

前野 良二（自治労連愛媛県本部）

今年の夏、広島県福山市にあるホロコースト記念館を訪れる機会があった。アンネ・フランクに焦点を当て「ホロコースト」の真実を伝えるミュージアムだ。展示品を見つめながら、あらためて頭の中にめぐっていたことは、現在のパレスチナの「ホロコースト」への憤りとやるせなさだ。イスラエルがこのままパレスチナ人を迫害し続けるとなると、同じ悲劇が繰り返されることは想像に容易いことだ。

そんなときに本書にめぐり逢い、著者はこう問いかける。「イスラエルのユダヤ人は、隣人であるパレスチナ市民が苦境にあえいでいるというのに、どうしてあれほど無頓着でいられるのか」と。さらに「イスラエルのユダヤ人は、この光と闇の世界をどのような世界観でつなぎ、折り合いをつけているのか。あるいはどちらかを無視して生きているのか」とたたみかける。著者は豊富な特派員経験をもとに、あらゆる角度からその疑問の答えに近づくことを試みる。

本書を読み進めていくと、知らぬうちに自問自答する自分がいることに気づく。モーゼの時代から迫害されてきた歴史を許すのか?　「約束の地」に帰還することを遮る者たちから自分自身を守ることが罪になるのか?　その一方で、悲劇の連鎖を断腸の想いで断ち切り尊い命を奪い合うことを即刻やめるべきか?それとも無関心に気づかぬふりをしているか?

ふと考えると、実際に眼前にある重要な課題に対して、思い悩み最善の答えを探している間はいいのかもしれない。しかし、自分の都合の良い情報だけを信じ自分の殻に引きこもることや、あるいは、ある遠い異国の出来事で関係のないことと自分を切り離してしまうことこそが、悲劇を招いてきた要因なのかもと考える。

いま「アメリカ人ファースト」「日本人ファースト」など、自国民優先の立場を表す言葉がもてはやされる傾向がある。日本においても、貧富の格差が拡大し、国民が物価高に苦しんでいることを背景に、領土問題や外国資本の土地取得などを過大に問題視するなかで「日本人ファースト」という言葉が、日本人にとって心地の良い言葉となっているのかもしれない。

SNSでのフェイク情報やメディアの偏重的ともいえる報道、嘘も真実も玉石混淆にちりばめられた情報を取捨選択するのは受け手側の責任だと言うが、果たしてそうなのだろうか。気持ちのよい情報だけ、望んでいる情報だけを受け入れたいというバイアスが潜んではいないか。そういったバイアスに迎合したメディアを私たちが作ってしまったという見方があってもおかしくはない。

異質を除外する排外主義の行く先は「敵」か「味方」かしか存在しない。イスラエルとパレスチナの現状には「人類の争い」の普遍性を感じざるを得ない。「戦後80年を経る日本にとっても、そこに漂う思考や世界観は『わがこと』として捉えるべきものではないかと感じる」と著者は読者に促す。

現在は「正解のない時代」とも言われる。しかし、語り尽くされたことかもしれないが、本書の最終章「紛争解決に向けた草の根の取り組み」で紹介される、地道ながらも民主主義の価値観と多様性を重視する活動が、政治と国際社会を変える原動力になることを信じている。

（まえの りょうじ）